

匂兵部卿

渋谷栄一訳

第一章 光る源氏没後の物語 光る源氏の縁者たちのその後

「第一段 匂宮と薫の評判」

光源氏がお隠れになつて後、あのお輝きをお継ぎになるような方、大勢のご子孫方の中にもいらつしやらないのであつた。御讓位された帝をどうこう申し上げるのは恐れ多いことである。今上帝の三の宮、その同じお邸でお生まれになつた宮の若君と、このお二方がそれぞれに美しいとのご評判をお取りになつて、なるほど、実に並大抵でないお二方のご器量であるが、ほんとうに輝くほどではいらつしやらないであらう。

ただ世間普通の人らしく、立派で高貴で優美でいらつしやるのを基本として、そのようなご関係から、人が思い込みでご評判申し上げている扱い、様子も、昔のご評判やご威光よりも、少し勝つていらつしやる高い評判ゆえに、一つには、この上なく威勢があつたのであつた。

紫の上が、格別におかわいがりになつてお育て申し上げたゆえに、三の宮は、二条院にいらつしやる。春宮は、そのような重い方として特別扱い申し上げなかつて、帝、后が、大変におかわいがり申し上げになり、大切にお世話申し上げになつてゐる宮なので、宮中生活をおさせ申し上げなさるが、やはり気楽な里邸を、住みよくお思いでいらつしやるのであつた。ご元服なさつてからは、兵部卿と申し上げる。

「第二段 今上の女一宮と夕霧の姫君たち」

女一の宮は、六条院南の町の東の対を、ご生前当時のお部屋飾りを変えずにいらして、朝晩に恋い偲び申し上げなかつてゐる。二の宮も、同じ邸の寢殿を、時々のご休息所になさつて、梅壺をお部屋になさつて、右大臣の中の姫君をお迎え申し上げていらつしやつた。次の春宮候補として、まことに信望が重々しく、人柄もしつかりしていらつしやるのであつた。

大殿の御姫君は、とても大勢いらつしやる。大姫君は、春宮に入内なかつて、また競争する相手もない様子で伺候していらつしやる。その次々と、やはりみなその順番通りに結婚なさるだろつと、世間の人もお思い申し上げ、後の宮も仰せになつていらつしやるが、この兵部卿宮は、それほどはお思いにならず、ご自分のお気持ちから生じたのではない結婚などは、おもしくなくお思いのご様子の方である。

大臣も、何の、同じようにと、そのようにばかりきちんきちんとすることはない」と落ち着いていらつしやるが、また一方で、そのようなご意向があるなら、お断りはしないという顔つきで、とても大切にお世話申し上げていらつしやる。六の君は、その当時の、少し自分こそはと自尊心高くいらつしやる親王方、上達部の、お心を夢中にさせる種でいらつしやるのであつた。

「第三段 光る源氏の夫人たちのその後」

いろいろとお集まりであつた御方々は、泣く泣く最後の生活をなさるべき邸々に、みなそれぞれお移りになつたが、花散里と申し上げた方は、二条東の院を、ご遺産としてお移りになつた。

入道の宮は、三條宮にいらつしやる。今後は、宮中にばかり伺候していらつしやるので、六条院の中は寂しく、人少なくなつたが、右大臣が、

「他人事として、昔の例を見たり聞いたりするにつけても、生きてゐる限りの間に、丹精をこめて造り上げた人の邸が、すっかり忘れられて、人の世の常のことながら無常に思われるのは、まことに感慨無量で、情けない思いがしないではいられないが、せめて自分が生きてゐる間だけでも、この院を荒廃させず、近くの大路など、人の姿が見えなくならないように」

と、お思いになりおっしゃって、丑寅の町に、あ的一条宮をお移し申し上げなさつて、三条殿と、一晩置きに十五日ずつ、きちんとお通いになつていらつしやるのであつた。

二条院と言つて、磨き造り上げ、六条院の春の御殿と言つて、世間に評判であつた玉の御殿も、ただお一方の将来のためであつたと思つて、明石の御方は、大勢の宮たちのご後見をしながら、お世話申し上げていらつしやつた。大殿は、どの方の御事も、故人のおとりきめ通りに、改変することなく、別け隔てなく親切にお仕えなさつているにつけても、対の上が、このように生きていらつしやつたならば、どんなに誠意を尽くしてお仕え申し御覽に入れたことであるうか。とうとう、多少なりとも特別に、自分が好意を寄せているとお分かりになつていただけの機会もなくて、お亡くなりになつてしまつたこと」を、残念に物足りなく悲しく思い出し申し上げなさる。

天下の人は、院を恋慕い申し上げない者はなく、あれこれにつけても、世はまるで火を消したように、何事につけてもはりあいのない嘆きを漏らさない折はなかつた。まして、殿の内の女房たち、ご夫人方、宮様方などは、改めて申し上げるまでもなく、限らないお嘆きの事はもちろんのこととして、またあの紫の上の様子を心に忘れず、いろいろのことにつけて、お思い出し申し上げなさらない時の間もない。春の花の盛りは、なるほど、長くないことによつて、かえつて大事にされるといふものである。

第二章 薫中将の物語 薫の厭世観と恋愛に消極的な人生

「第一段 薫、冷泉院から寵遇される」

二品の宮の若君は、院がお頼み申し上げなさつておるとおりで、冷泉院の帝が、特別に大切になさり、後の宮も、親王方などいらつしやらず、心細くお思いのために、嬉しいご後見役として、お頼み申し上げていらつしやつた。ご元服なども、院の御所でおさせになる。十四歳で、二月に侍従におなりになる。秋、右近衛府の中將なつて、恩賜の加階などまで、どこが気がかりなのか、急いで加えてご成人させなさる。お住まいあそばす御殿の近

くの対の屋をお部屋にしたたりなど、院御自身で監督なさつて、若い女房も、女の童、下仕えまで、すぐれた人を選びそろえ、姫宮の御儀式よりもまぶしいほど立派にお整えさせなさつていた。

院の上におかれても中宮におかれても、伺候している女房の中でも、器量がよく、上品で難がない者は、みなお移しなさりなすりして、院の中を氣に入つて、住みよく生活しよく思うようにとばかり、特別にお世話しようとお思いなつていらつしやつた。故致仕の大殿の女御と申し上げたお方に、女宮がただお一方いらつしやつたのを、この上なく大切にお育てなさつていゝるのに負けないほど、後の宮の御寵愛が、年月とともに厚くなつてゆく感じなのであるうが、どうして、そんなにまですることがあるう、と思われほどである。

母宮は、今はただご勤行だけを静かになさつて、毎月のお念仏、年に二回の御八講、折々の尊い御仏事の営みばかりなさつて、他に何もすることなくいらつしやるので、この君がお出入りなさるのを、かえつて親のようになり、頼りになる方とお思いでいらつしやつたので、とてもおいたわしくて、院におかせられても帝におかせられても、いつもお召しになり、春宮も、次々の親王方も、親しいお遊び相手としてお誘いになるので、暇もなく苦しうて、何とかして身体を分けたいものだ」と、思われなさるのであつた。

「第二段 薫、出生の秘密に悩む」

子供心にかすかにお聞きになつたことが、時々氣にかかり、どうしたとかとずつと思ひ続けていたが、尋ねるべき人もいない。宮には、事的一端なりとも知つてしまつたと思われなさるのは、具合の悪い筋合なので、それ以来心から離れることなく、

「どのようなことであつてか、何の因果で、このような氣がかりな思ひを身にまどつて生まれてきたのだらうか。善巧太子が、わが身に問うている悟りを得たいものだ」と、つい独り言が漏れなさるのであつた。

「はつきりしないことだ、誰に尋ねたらよいものか。どうして初めも終わりも分らない身の上なのだらう」

答えることのできる人はいない。何かにつけて、自分自身に悪いところ

のある感じがするの、気持ちが悪く着かず、何か物思ひばかりがされ、あれこれ思案して、母宮もこのような盛りのお姿を尼姿になさつて、どのような御道心でからか、急に出家されたのだろう。このように、不本意な過ちがもとで、きつと世の中が嫌になることがあつたのだろう。世間の人も漏れ聞いて、知らないはずがあるうか。やはり、隠しておかなければならないことのために、わたしには事情を知らせる人がいないよつた」と思つた。

「朝晩、勤行なさつていようだが、とりとめもなくおつとりしていらつしやる女のお悟りの状態では、蓮の露も明らかなように、玉と磨きなさることも難しい。五つの障害も、やはり不安だが、わたしが、このお志を、同じことならせめて来世を」と思つた。あの亡くなつたという方も、辛い思いに迷いが解けないでいるのではないかと、などと推量するが、生まれ変わつてもお会いしたい気がして、元服は気がお進みにならなかつたが、辞退しきれず、自然と世間から大事にされて、眩しいほど華やかなご身辺も、一向に気に染まず、ひつこみ思案でいらつしやつた。

「第三段 薫、目覚ましい栄達」

帝におかせられましたも、母宮の御縁続きの御好意が厚くて、大変にかわいい者としてお思いあさばされ、后の宮も、また、もともと同じ邸で、宮方と一緒にお育ちになり、お遊びなさつたころの御待遇を、すこしもお改めにならず、晩年にお生まれになつて、気の毒で、大きくなるまで見届けることができないこと」と、院がおつしやつていたのを、お思い出し申し上げなつては、並々ならずお思い申し上げていらつしやつた。

右大臣も、ご自分のご子息たちよりも、この君を気にかけて大事にお扱い申し上げていらつしやる。

昔、光君と申し上げた方は、あのような比類ない帝の御寵愛であつたが、お憎みなさる方があつて、母方のご後見がなかつたりなどしたが、ご性質も思慮深く、世間の事を穏やかにお考えになつたので、比類ないご威光を目立たないように抑えなさり、ついに大変な天下の騒ぎになりかねない事件も、無事にお過ごしになつて、来世のご勤行も時期を遅らせなさらず、万事目立たないようにして、遠く先をみて穏やかなご性格の方であつたが、こ

の君は、まだ若いうちに、世間の評判が大変に過ぎて、自負心を高く持つていることは、この上なくいらつしやる。

なるほど、そうあるはずのように、とてもこの世の人としてできているのではない、人間の姿を借りて宿つたのかと思えることがお加わりであつた。お顔の器量も、はつきりそれと、どこが素晴らしい、ああ美しい、と見るところもないが、ただたいそう優美で気品高げで、心の奥底が深いような感じが、誰にも似ていないのであつた。

薫の香ばしさは、この世の匂いでなく、不思議なまでに、ちよつと身じろぎなさる周囲の、遠く離れている所の追い風も、本当に百歩の外も薫りそうな感じがするのであつた。どなたにも、あれほどのご身分で、たいそう身をやつし、平凡な恰好でいられようか、あれこれと、自分こそは誰よりも良くあつと、おしやれをし気をつかうはずなのであるが、このように体裁の悪いほど、ちよつとお忍びに立ち寄ろうとする物陰も、はつきりこの人と分かる薫りが隠れ場もないので、厄介に思つて、ほとんど香を身におつけにならないが、たくさん御唐櫃にしまつてあるお香の薫りも、この君のは、何ともいえない匂いが加わり、お庭先の花の木も、ちよつと袖をお触れになる梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身にしみて感じる人が多く、秋の野に主のいない藤袴も、もとの薫りは隠れて、やさしい追い風が、特に折り取られて一段と香が引き立つのであつた。

「第四段 匂兵部卿宮、薫中將に競い合う」

このように、まことに不思議なまで人が気のつく薫りに染まつていらつしやるのを、兵部卿宮は、他のことよりも競争心をお持ちになつて、それは、特別にいろいろの優れたのをたきしめなさり、朝夕の仕事として香を合わせるのに熱心で、お庭先の植え込みでも、春は梅の花園を眺めなさり、秋は世間の人が愛する女郎花や、小牡鹿が妻とするような萩の露にも、少しもお心を移しなさらず、老を忘れる菊に、衰えゆく藤袴、何の取柄もないわねもこうなどは、とても見るに堪えない霜枯れのころまでお忘れにならないなどというふうに、ことさらめて、香を愛する思いを、取り立てて好んでいらつしやるのであつた。

こうしていることに、少し弱く優し過ぎて、風流な方面に傾いていらしやると、世間の人はお思い申していた。昔の源氏は、総じて、このように一つに事を取り立てて、異様なふうに、熱中なせることはなかつたものである。源中将は、この宮にはいつも参上しては、お遊びなどにも、張り合う笛の音色を吹き立てて、いかにも競争者として、若い者同士が好意をお持ちになつていようなご様子である。例によつて、世間の人は、匂う兵部卿、薫る中将」と、聞きずらいほど言い立てて、その当時に、良い娘がいらつしやる、高貴な所々では、心をときめかして、婿にと申し出たりなさる人もあるので、宮は、あれこれと、興味の惹かれそうな所にはお言葉をお掛けになつて、相手のお人柄、ご様子をもお窺いになる。特別のご熱心にお思いになる方は、格別いなかったのである。

「冷泉院の女一の宮を、結婚して一緒に暮らしてみたいものだ。きつとその甲斐はあるだろう」とお思いになつてゐるのは、母女御もとても重々しくて、奥ゆかしくいらつしやる所であり、姫宮のご様子は、なるほどと、めつたにないくらい素晴らしくて、世間の評判も高くいらつしやるうえに、それ以上に、少し近くに伺候し馴れている女房などが、詳しいご様子などを何かの機会にふれてお耳に入れることなどもあるので、ますます我慢できなくお思いのようである。

「第五段 薫の厭世観と恋愛に消極的な性格」

中将は、世の中を深くつまらないものと悟り澄ました気持ちなので、なまじ女性に執着して、出家しにくい思いが残ろつたか」などと思つので、厄介な思いをしそうなどころに關係するのは、遠慮されて「などと諦めていらつしやる。さしあつて、心に氣に入りそうな事がない間は、賢ぶつていたのであろうか。親の承諾しないような結婚などは、なおさら思つはずもない。

十九歳におなりの年、三位宰相になつて、やはり中将を辞めていない。帝、後の御待遇で、臣下であつては、遠慮のない幸い人のご人望でいらつしやるが、心の中ではわが身の上について思い知るところがあつて、もの悲しい気持ちなどがあつたので、勝手気ままな浮いた好色事、まつたく好きで

なく、万事控え目に振る舞つては、自然と老成した性格を、人からも知られていらつしやつた。

三の宮が、年齢とともに熱心でいらつしやるらしい、院の姫宮のご様子を見るにつけても、同じ院の内に、朝に夕に一緒に暮らしたので、何かの機会にふれても、姫のご様子を聞いたり拝見したりするので、なるほど、たいそう並々でない。奥ゆかしく嗜み深いお振る舞いはこの上ないので、同じことならば、ほんとうにこのような人と結婚するのこそ、生涯楽しく暮らせる糸口となることだろう」とは思つものの、普通の事は分け隔てなくお扱いでいらつしやるが、姫宮の御事の方面の隔ては、この上なくよそよそしく習慣づけていらつしやるのも、もつともなことに厄介な事なので、無理に近づこうとはしない。もし、思いも寄らない気持ちが起こつたら、自分も相手もまことに悪い事だ」と分別して、馴れ馴れしく近づき寄ることはなかつたのであつた。

自分が、このように、人から誉められるように生まれついていらつしやる有様なので、ちよつと何気ない言葉をおかけになる相手の女性も、まつたく相手にしない気持ちはなく、靡きやすい程度なので、自然とたいして氣の染まない通い所も多くになるが、相手に対して、大仰な待遇はせず、たいそううまく紛らわして、どことなく愛情がないでもない程度で、かえつて氣がもめるので、情けを寄せる女は、氣が引かれ引かれして、三条宮に参集する者が大勢いる。

冷淡な態度を見るのも、辛いことのようにであるが、すっかり仲が絶えてしまふよりはと、心細さが辛くて、宮仕えなどしない身分の人々で、頼りない縁に期待をかけている者が多かつた。そうはいつても、とてもやさしく、見所のある方のご様子なので、一度会つた女は、みな自分の気持ちにだまされるようにして、つい大目に見てしまふのである。

「第六段 夕霧の六の君の評判」

「母宮が生きていらつしやるうちは、朝夕にお側を離れずお目にかかり、お仕え申し上げることを、せめてもの孝養に」

と思つておつしやるので、右大臣も、大勢いらつしやる姫君たちを、誰か

一人は、とお思いになりながら、口にお出しになることができない。」「なんといつても、近い縁者なのでおもしろみがない」と思つてはみるが、この君たちを措いて、他に、肩を並べるような人を探し出せるであろうか」とお困りになる。

れつきとした姫君よりも、典侍腹の六の君とか、たいそう素晴らしくて美しそうで、氣立てなども申し分なくて成人なさつているのを、世間の評判が低いのがかえつて、このように惜しいのを、不憫にお思いになつて、一条宮が、そういうお子様をお持ちでなく手持ち無沙汰なので、迎え取つて差し上げなされた。

「わざわざとではなく、この方々に一度お見せしたら、きつと熱心になるにちがひなかるう。女性の美しさが分かる人は、特に格別であろう」などとお思いになつて、はなはだ威厳ばつてはお扱いにならず、今風で趣あるように、しゃれた暮らしをさせて、人が熱心になるような工夫を沢山凝らしていらつしやる。

「第七段 六条院の賭弓の還饗」

賭弓の還饗の準備を、六条院で特別念入りになさつて、親王方もご招待しようとお心づもりをしていらつしやうした。

その当日、親王方で、大人でいらつしやる方は、みな伺候なさる。后腹の方は、どの方もどの方も、氣高く美しそうにいらつしやる中でも、この兵部卿宮は、ほんとうにたいそう素晴らしくこの上なくお見えになる。四の親王で、常陸宮と申し上げる方は、更衣腹である方は、思いなしか、感じが格段に劣つていらつしやうした。

いつものように、左方が、一方的に勝つた。いつもよりは、早く賭弓が終わつて、大將が退出なさる。兵部卿宮、常陸宮、后腹の五の宮と、同じお車にお招き乗せ申し上げて、退出なさる。宰相中將は、負方で、静かに退出なさつたが、

「親王方がいらつしやるお送りに、お出でになりませんか」

と、退出をおし止めなさつて、「ご息の衛門督を、権中納言、右大弁など、それ以外の上達部が大勢、あれこれの車に乗り合つて、誘い合つて、六条

院へいらつしやる。

道中やや時間のかかるうちに、雪が少し降つて、優艶な黄昏時である。笛の音色を美しく吹き立てながらお入りなると、なるほど、「ここを措いて、どのような仏の国が、このような時の楽しみ場所を求めることができようか」と見えた。

寢殿の南の廂間に、いつものように南向きに、中將少將がずらりと着座し、北向きに対座して、垣下の親王方、上達部のお座席がある。お盃の事などが始まつて、何となく座がはずんでくると、「求子」を舞つて、翻る袖の数々をおふる羽風に、お庭先の梅がすっかり満開になつて、薫りが、さつと一面に漂つて来ると、いつものように、中將の薫りが、ますます素晴らしく引き立てられて、何とも言えないほど優美である。わずかに覗いている女房なども、「聞ははつきりせず、見たいものだが、あの薫りは、なるほど他に似たものがありませんね」と、誉め合つていた。

大臣も、たいそう立派だと御覧になる。「ご器量やお振る舞いも、いつも以上で、行儀正しく澄ましているのを見て、

「右の中將も一緒にお歌いになりませんか。とてもお客人ぶつていますね」とおつしやるので、無愛想にならない程度に、「神のます」などと。

